

木々に囲まれた屋敷

万行町は竹垣の里として知られ、また、平地にもかかわらず森が点在するという独特の雰囲気をもし出している。平地は田畑や宅地にほとんどが使われていると思っていたので不思議な感じを受けた。

散策してみると、家屋敷の周囲や庭先に植えてある木々は、庭木と呼ぶより森と呼ぶ方がふさわしいと思えるほどの木々が植えてあることに驚かされる。

この地域は近くにある城山からの吹きおろしの風や、かつては近くにあった海からの潮風など、風の通り道にあり、また、その風が強く、冬には雪が強風に乗って屋敷に吹き込んできていたと想像される。そのため森になるほど多くの木々を防風林や雪囲いとして植える必要があったのだろう。

「森」にはスギ、アテ、タケなど暮らしに使われてきた木々が多く植えられており、特にタケの姿が目立つ。

ここに植えられた竹はマダケ（真竹）やモウソウチク（孟宗竹）などで、現金収入の糧として、筍はもとより、マダケは「稲ハザ（ハソ）」や桶の「たが」、「竹垣」などとして、モウソウチクは大敷網の浮として売られていた。

また、こうして売られた竹の残り

部分「とんぼ」とよばれる先端部を使い自らの家屋周辺の竹垣を作っていたため、このあたり特有のタケの先端部分を使った竹垣の姿になっていたそうだ。



これらの森には他に、コブシ、ツバキ、タブ、ケヤキなども生えており、中には樹齢数百年にはなるかどうかという老木も見られる。

こうした古木の中には、民話の舞台となったものもあり、「三右エ門と天狗」という話が残されている。

天狗の住む森

この民話によれば、かつて万行の竹端に住む三右エ門という人がいて、その三右エ門の屋敷の庭にある

大木の上に天狗が住んでいたというものである。天狗といえば山奥の巨木に住んでいるというイメージがあるが、万行町のような平地にこのような民話が残されているということには不思議な感じを受ける。

この舞台となった木は報国町（万行町）にあり、今は地藏が祀られていると聞いたので出かけてみた。

そこは、報国町のゲートボール場近くの小さな森で、田の脇から細い参道が森の中へ続いていた。参道を進み森へ入ると、すぐに集会所のような建物が見えて来る。建物の横を通り奥へ進むと、地藏堂としめ縄を巻いたタブの古木の前へ出た。

タブの木は確かに年輪を重ねた古木であるが、民話に出てくる天狗が住んでいたといわれる木にしては若い感じを受けた。後に植えられたものであろうか。しかし、周囲の薄暗さと木々の間から漏れる木漏れ日は、確かにここが天狗の住んでいた場所だろうと思わせる神秘さを感じさせてくれた。



タブの古木